

## 演題番号 青少年の首尾一貫感覚(SOC)、生きがい感、およびうつ傾向の関係

(事務局記入) ○新谷健介 したにけんすけ (立教大学), 遠藤伸太郎 (立教大学),  
大石和男 (立教大学)

038

【背景】近年、日本では青少年の間での生きがい感の喪失、うつ傾向の増大が指摘されている。そのような中、Antonovsky が提唱した首尾一貫感覚 (Sense of coherence : SOC) が注目を集めている。SOC とは、自分の生きている世界は首尾一貫している、筋道が通っている、訳がわかる、腑に落ちるといった感覚である。この SOC が高い場合、人はストレスフルな状況に置かれても、生きる意味を失わずに柔軟に対処し、心理的な不調に陥らないと考えられている。

【目的】先行研究では、SOC がうつ傾向と負の相関関係にあることが報告されているが、生きがい感およびうつ傾向との関連についてはこれまで報告されていない。そこで、本研究では、青少年の SOC、生きがい感、およびうつ傾向の相互の関係性を調べた。

【方法】調査対象者は大学生 526 名 (男子 225 名、女子 301 名) で、平均年齢は  $19.7 \pm 1.3$  歳であった。調査対象者には、SOC の程度の測定 (13 項目、7 件法)、生きがい感の程度を測定する PIL テスト (パート A)、そして SDS の 3 つのテストを実施した。加えて、SOC の程度 (SOC 合計点) とその 3 つの下位概念 (有意味感合計点、把握可能感合計点、処理可能感合計点)、生きがい感の程度 (PIL 合計点)、うつ傾向の程度 (SDS 合計点) の 6 つの変数を設定し、その関係を調べた。

【結果】PIL 合計点と有意味感合計点および SOC 合計点との間にそれぞれ正の相関がみられた ( $r=0.73, 0.62$ , ともに

$p<0.001$ )。一方、PIL 合計点と、SOC 合計点および 3 つの下位概念、それに SDS 合計点との間には、それぞれ負の相関 ( $r=-0.70, -0.68, -0.57, -0.48, -0.50$ , 全て  $p<0.001$ ) がみられた。また SDS 合計点を目的変数とし、PIL 合計点および SOC の 3 つの下位概念を説明変数とした重回帰分析の結果、それぞれ PIL 合計点、有意味感、処理可能感、把握可能感 ( $\beta=-.71, -.47, -.29, -.24$ , 全て  $p<0.01$ ) の順でうつ傾向に有意に影響を与えていたことが明らかであった。

【考察】以上の結果より、高い SOC をもつ者は生きがい感の程度が高く、抑うつの程度が低い可能性が示唆された。この結果は、SOC が高い者は抑うつ傾向が低いというこれまでの報告を支持するものである。また、SOC の有意味感と PIL 合計点の間には強い正の相関がみられたことから、この 2 つの変数は密接に関連している可能性がある。

【結論】SOC の中でも特に有意味感を高めることは、生きがい感を高めることにつながり、その結果、うつ傾向を改善している可能性が示唆された。

SOC に詳しい方の参加をお願いします。

(連絡先)

新谷健介

〒352-8558

埼玉県新座市北野 1-2-26

立教大学新座キャンパス

memoriesoff1124@gmail.com